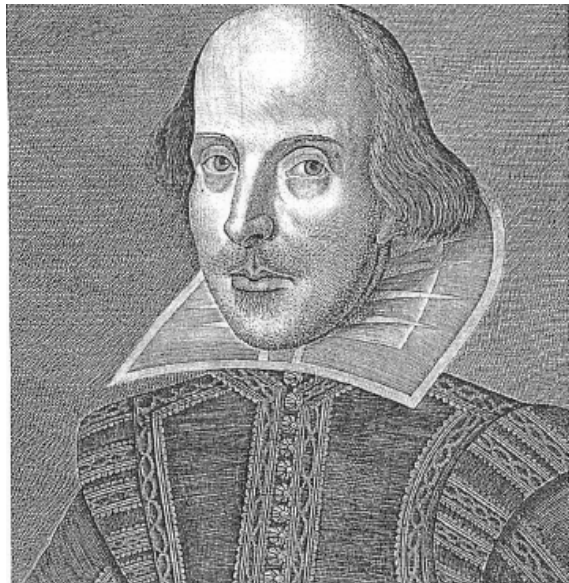


『ハーン先生と漱石先生』

# 「漱石とシェイクスピア」

平成28年年11月22日(木)



熊本大学文学部文学科  
松岡浩史

# 漱石・シェイクスピア関連略年表

明治19年頃（東京大学予備門予科生時代）

- ・中村是公に『ハムレット』を貰うが、「些とも分らなかった」。

明治29年頃（第五高等学校講師時代）

- ・課外授業として『ハムレット』、『オセロー』を講義。

明治33年（英国留学時代）

- ・『十二夜』をはじめ、芝居見物に出かける。
- ・シェイクスピア研究者クレイグ教授の個人指導を受ける。

明治36年（東京帝国大学講師時代）

- ・講義でシェイクスピア評釈を行う。

明治37年 小松武治訳『沙翁物語集』の序に「子羊物語に題す十句」を寄稿。

明治39年 本郷座で坪内逍遙の『ハムレット』観劇し、酷評。

明治42年 帝国劇場で再び逍遙の『ハムレット』観劇し、酷評。

# 『草枕』と『ハムレット』

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

『草枕』（一）

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴で埋っている。元来何しに世の中へ面を曝しているんだか、解しかねる奴さえている。しかもそんな面に限って大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのをもって、さも名誉のごとく心得ている。

『草枕』（十一）

# ハムレットの厭世観

この世のいとなみの一切が  
退屈で、陳腐で凡庸で、無駄に思えてならない！  
ああ、厭だ厭だ、まるで雑草が伸び放題の  
荒れ果てた庭。むかつく下劣なものだけが  
わがものの顔にのさばっている。

『ハムレット』 第1幕第2場

生きてとどまるか、消えてなくなるか、それが問題だ。  
どちらが雄々しい態度だろう、  
やみくもな運命の矢弾を心の内でひたすら耐え忍ぶか、  
艱難の海に刃を向け  
それにとどめを刺すか。

『ハムレット』 第3幕第1場

## 逆説とオクシモロン

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきっと影がさすと悟った。三十の今日是这样子思うている。  
一喜びの深きとき憂いよいよ深く、楽みの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとするれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかる。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食べば飽き足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ。……

『草枕』 (一)

# 逆説とオクシモロン

胸にはいわばくじかれた喜びを抱き、  
一方の目には笑みを、もう一方の目には涙を浮かべ、  
葬儀には祝福の歌を、婚礼には挽歌をかなで、  
歓喜と悲哀を等しく秤に振り分けて妻を迎えたのだ。

『ハムレット』 第1幕第2場

同様ノ事ヲ異様ノ語ニテ重疊シテ用フ沙ノ壇場ノ技ナリ

「蔵書への書き込み (642)」

# 『草枕』の女性像

## 花・水・死、そして狂気

余はまた写生帖をあける。この景色は画にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。不思議な事には衣装も髪も馬も桜もはっきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかった。しばらくあの顔か、この顔か、と思案しているうちに、ミレーのかいた、オフエリヤの面影が忽然と出て来て、高島田の下へすぽりとはまった。これは駄目だと、せっかくの凶面を早速取り崩す。衣装も髪も馬も桜も一瞬間に心の道具立から奇麗に立ち退いたが、オフエリヤの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧と胸の底に残って、棕櫚箒で煙を払うように、さっぱりしなかった。空に尾を曳く彗星の何となく妙な気になる。

『草枕』（二）



John Millaisの*Ophelia*  
(1852年、テート・ブリテン収蔵)





王妃　柳の木が小川の上に斜めに身を乗り出し  
鏡のような流れに銀の葉裏を映しているあたり。  
あの娘は、その小枝で奇妙な冠を作っていました。  
キンボウゲ、イラクサ、ヒナギク、シランなどを編み込んで。  
あの花を、はしたない羊飼いたちは淫らな名で呼び  
清らかな乙女たちは「死人の指」と名付けている。  
それからあの娘は柳によじ昇り、しだれた枝に花冠を掛けようとした途端  
意地の悪い枝が折れて  
花冠もあの娘もすすり泣く流れに落ちてしまった。裳裾が大きく広がって  
しばらくは人魚のようにたゆたいながら  
きれぎれに古い賛美歌を歌っていました。  
身の危険など感じてもないのか  
水に生まれ水に棲む生き物のよう。  
でも、それも束の間、  
水を含んで重くなった衣が  
可愛そうに、あの娘を川底に引きずり込み  
水面に浮かんでいた歌も泥にまみれて死にました。

『ハムレット』 第4幕第7場

オフィーリア

...

明日はヴァレンタインの日  
朝早くから窓辺に立って  
一目会えたら願いがかなう  
恋しい人は起きてきて  
扉を開けてくれました  
入るときには娘でも  
出てくるときはそうじゃない

...

聖人さまの名にかけて  
ほんとにひどい恥知らず  
若い男がその気になれば  
やることなすことみな同じ  
あなたが私を抱く前に  
夫婦の約束したくせに  
男の返事は  
お前のほうから抱かれにこなきゃ  
きっとそうしていたものを

『ハムレット』 第4幕第5場

「嬢様と長良の乙女とはよく似ております」

「顔がかい」

「いいえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、その長良の乙女と云うのは何者かい」

「昔しこの村に長良の乙女と云う、美しい長者の娘が御座りましたそうな」

「へえ」

「ところがその娘に二人の男が一度に懸想して、あなた」

「なるほど」

「ささだ男に靡こうか、ささべ男に靡こうかと、娘はあけくれ  
思い煩ったが、どちらへも靡きかねて、とうとうあきづけばを  
ばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも  
と云う歌を咏んで、淵川へ身を投げて果てました」

『草枕』(二)

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乗って、峠を越すと、いきなり、ささだ男と、ささべ男が飛び出して両方から引っ張る。女が急にオフェリヤになって、柳の枝へ上って、河の中を流れながら、うつくしい声で歌をうたう。救ってやろうと思って、長い竿を持って、向島を追懸けて行く。女は苦しい様子もなく、笑いながら、うたいながら、行末も知らず流れを下る。余は竿をかついで、おいおいと呼ぶ。  
そこで眼が醒めた。

『草枕』 (三)

余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗なきあたりへ漂わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同化してしまう。流れるもののほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督の御弟子となったよりありがたい。なるほどこの調子で考えると、土左衛門は風流である。スウィンバーンの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがっている感じを書いてあったと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフエリヤも、こう観察するとだ  
いぶ美しくなる。

『草枕』（七）



こんな所へ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思いつながら、元の所へ帰って、また煙草を吞んで、ぼんやり考え込む。...しかし人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝ってはすべてを打ち壊わしてしまう。と云ってむやみに気楽ではなお困る。...いろいろに考えた末、しまいにようやくこれだと気がついた。多くある情緒のうちで、憐れと云う字のあるのを忘れていた。憐れは神の知らぬ情で、しかも神にもっとも近き人間の情である。御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが画は成就するであろう。

私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯だ一種の感じ—美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない。

「余が『草枕』」

西洋人は執濃いことがすきだ。華麗なことがすきだ。芝居を観ても分る。食物を見ても分る。建築及飾粧を見ても分る。夫婦間の接吻や抱き合うのを見ても分る。これが皆文学に返照している故に洒落超脱の趣に乏しい。（略）

「日記」 明治34年 3月12日（火）

# 『草枕』が主張する感覚的美とは？

- ・ 感覚的美は人情を含まない。
  - ・ 人間の情緒が活動するときに人間は人情を発揮する。
- (a) 全く人情を捨てて見る。松や梅を見るように。＝非人情的
  - (b) 全く人情を捨てきれず、同情や反感を覚えるが、芝居を見る場合のように、利害がなく純粹な同情や反感である場合。＝純人情的
  - (c) 現実世界と同様の同情や反感を起こして人間の活動を見る場合。＝俗人情的

「画工は非人情的である。沙翁は純人情的である。而して吾々日々パンに汲々として喧嘩をしてくらす人間は俗人情的である。」

森田草平宛書簡（明治39年9月30日）から要約

# 『草枕』が主張する感覚的美とは？

